

SNW 対話イン九工大 2012 概要報告

平成 24 年 11 月 30 日（世話役）金氏 顯



鳳龍会館での懇親会での
集合写真

2 列目の右から 5 人目は
松永守央学長、6 人目が
白土竜一教授です。

1. 日時

平成 24 年 11 月 22 日（木） 13 : 00～18 : 00（引き続き懇親会～20 : 00）

2. 場所

九州工業大学戸畑キャンパス（教育研究 5 号棟 5-2A 教室、他）

3. 大学側参加先生方

松永守央学長（懇親会のみ）

電気電子工学研究系：白土竜一教授（世話役）、三谷康範教授、匹田政幸教授、大塚信也准教授、渡邊政幸准教授、機械知能工学科：赤星保浩教授

4. 参加学生先端電気エネルギー特論受講生（M1、47 名）

5. 参加シニア

高野元太、針山日出夫、若杉和彦、（以下 SNW 九州）大塚徳勝、金氏 顯、小池正実、中田眞一郎、樋口勝彦、村島正康、米永國照、

6. プログラム（全体進行&司会は白土先生）

13 : 00～13 : 05 開会挨拶：白土先生

13:05-13:10 シニアの挨拶（樋口）と各自自己紹介

13 : 15～14 : 15 基調講演：講演者：金氏 顯（九工大客員教授として）
14 : 15～14 : 30 ファシリテーションのガイダンス（金氏）
14 : 30～17 : 00 グループ対話：研究室ごとの5グループ。
17 : 00～17 : 40 グループ別発表（8分（発表5分、質疑3分）×5グループ）
17 : 40～18 : 00 講評（若杉、村島、大学匹田教授）、閉会挨拶（白土先生）
18 : 15～20 : 00 懇親会@鳳龍会館

7. 開会挨拶

（白土先生）今日は、原子力の講義、そしてその後の原子力産業界の経験者との討論会は、この「先端電気エネルギー特論」の最終講義として大変相応しいものと期待しています。学生の皆さんは何でも聞いて又自分の意見も言って、さすが九州工業大学だということを発揮して欲しい。

（樋口）エネルギーと原子力の正しい知識は益々必要であり、特に次世代にそのことを伝達したいと6年前に原子力学会にシニアネット（SNW）を、昨年2月にSNW九州を設立した。

8. 基調講演（講演者：金氏 顯、九工大客員教授として）

テーマ「世界の原子力事情とわが国のあり方～技術者の役割」

内容：世界のエネルギー事情、わが国のエネルギー安全保障の脆弱性、発電コストなど比較、“2030年代原発稼働ゼロ”の問題点、原子力開発の変遷（福島事故前後、その背景）、ドイツの脱原発政策の実態、わが国の原子力開発と信頼性向上の実績、東電福島事故の原因と教訓、PWRとBWR、緊急安全対策と更なる安全対策、40年寿命、核燃料サイクルと高レベル廃棄物地層処分、原子力開発の将来、プラントメーカー技術者の役割、今後のわが国の基幹産業分野と求められる技術者像

9. グループ対話の詳細

（1）学生の事前の質問事項

第1グループ：学生「和泉・川島研（半導体の研究）」、SNW[村島、高野]

- ・ どの発電方式が原子力発電を補う良い方式だと思いますか？
- ・ 原子力発電の安全性をアピールするとしておきの技術などがありますか？
- ・ 原子力発電は再稼働派ですか？その理由は？

第2グループ：学生「大塚研（電力機器の研究）＋渡邊研（電力系統の研究）」、SNW（若杉、米永）

- ・ 3.11以降原子力発電所において地震対策・津波対策はどのようになされているのか？
- ・ 現在では原発の危険性における新聞やニュースを多く目にすることが増えたため原発が危険だという印象が多いが、原発反対を訴えている人たちに原発の安全性を納得させるためにはどうしたらよいか？

- ・日本の発電における経済性や環境といった面からみても原発をこれ以上の新設をしないや安全対策の完備といった条件付きで再稼働するべきだと考えているが、どのようにお考えですか？また再稼働する際にどのようなことが重要だと考えていますか？
- ・将来の原子力発電を担う若手技術者が減少傾向にあるらしいですが、これは 3.11 以降のことですか？それ以前ならなぜ減少しているのでしょうか？
- ・日本の原発のテロ対策は飛行機の墜落などを想定していないそうですが大丈夫でしょうか？
- ・フランスでは原子力発電が主となっているが海外と日本では何が違うのか？また原発関連の人が海外に流出していると聞いたが、日本の技術流出の対策などはしているのか？
- ・今後、原子力発電を再稼働するための条件の一つとして国民の了承を得ることが挙げられると思うのですが、そのために現在行っていること、また、後行おうとしていることはなんですか？さらに、反原発派の人々に対して、どのようなことを行なうと納得してもらえると考えていますか？
- ・現在の緊迫した国際状況の中で、原発を対象としたテロなどが起こりうると思われるのですが、それに対してはどのような対策をしているのでしょうか？
- ・日本での原発の新設や運用計画が滞る中で原子力発電の技術や人材の確保についてどうすべきか聞かせてください。また、今後の日本における原子力産業への方針や取り組みについて教えてください。
- ・現在、原発を再び起動させるのは厳しいと思われますが、今後どのような取り組みを行って、国民に支持してもらうようにするのか、その対策を教えてください。また、再起動しないなら電気料金の引き上げ以外に何か対策を行いますか？

第 3 グループ：学生「大村・匹田・内藤研（電力用半導体、電力機器、表面物性の研究」、SNW[樋口、針山]

- ・安全性は誰が評価しますか？
- ・どのような基準で安全とみなしますか？
- ・震災以降の安全基準にどのような変化がありますか？
- ・第三者委員会（原子安全保安院）との繋がりがありますか？
- ・原発で従事している方で、原子力が安全かどうかの本音と建前は？
- ・電力会社は震災時、どのような対処・対策をしていましたか？
- ・原発についてどう思っていますか？
- ・原発の開発工程の開発分担はどのようになっていますか？
- ・核廃棄物の最適な処理方法・場所を教えてください。

第 4 グループ：学生「白土・豊田・松平研（太陽電池とその宇宙利用の研究」、SNW[小池、金氏]

- ・日本において原子力は昼夜問わず一定に供給できる電力として重宝されていたが、それが停止した今、埋め合わせとして代替可能といえる発電方式は何か？

- ・原発事故が起こった地域の風評被害への具体的な対策法は何か？または何を今まで実地してきたか？
- ・発電所や地元、関連企業における雇用、自治体の財政基盤に実際にどのような影響が出ているか？また、それに対してどのような対策を実施しているか？
- ・原子力発電の小規模稼働は可能なのか？
- ・原子力発電のコストは建設費などを含めて、他の発電と比べて安いといえるのか？（廃棄物処理も含めて）
- ・停止した原子力発電の今後の利用方法は？
- ・青森県の下北半島には原子燃料サイクル施設として高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター、再処理工場などがあるが管理法などが確定しておらず現在上手く機能していないが、今後どのように機能させていくか目処は立っているのか？
- ・原子力発電は止まっているので上記の核燃料サイクルでの再利用が皆無な訳だが、現在余っている核燃料はどうするのか？つまり、廃棄物処理は、どうしていくのか？

第5グループ：「松本研＋三谷研（パワーエレクトロニクス、電力系統の研究」、SNW[大塚、中田]

- ・太陽電池を用いて研究を行って（います。原子力に携わった立場から太陽光発電はどのように見えるか、また今後太陽電池はどのように考えていますか？
- ・電力の安定供給の面で、再生可能エネルギーを利用する場合、既存の発電方法に比べてこれは大きく信頼性に欠けるが、大規模な充電施設を設置する以外の方法でこれを解決する方法はあるか？
- ・発電効率、コスト、安全性などの観点から、エネルギー資源を自国で産出する以外の方法で既存の発電政策を超える政策案はありますか？
- ・太陽電池等の再生可能エネルギーを現在の火力発電や原子力発電のように大規模で用いる場合、発電素子の発電効率を上げること以外で発電する電力の価格を下げる方法がありますか、また、そのためにはどういった技術、設備が必要ですか？
- ・今後の発電効率向上について、今実際に検討されている中で最も有力なものは何ですか？
- ・東日本大震災により、原子力発電に対して否定的な意見が相次いでいますが、原子力発電の安全性を認知してもらうのに最良の方法はなんだと考えていますか？
- ・原子力発電に携わっている人にしかわからない原子力発電の欠点はありますか？
- ・原子力発電所はほとんど沿岸部に建設されているイメージがありますが、それは海水を利用しているためだと認識しています。そこで、内陸部で湖や川の水などを利用して原子力発電を行うことは不可能なのですか？
- ・原子力発電機メーカー同士での談合などは開催されたことはありますか、またその予定はありますか？
- ・僕たちの世代に望むことは何ですか？
- ・原発停止に伴い電力会社は経済的に苦しくなったが、それ以外の会社や場所で経済的に何らかの影響はあったのか。

- ・ 原発の資源であるウランは何年分あるのか。
- ・ 今後、原子力発電を再開するかしないかの問題において原子力発電とその他の発電の危険性の比較。
- ・ もし再稼働が認可されるとしたらこの発電所を復活させるのか、または新たに安全面を強化した発電所を建設するのか。
- ・ 原子力発電を長期的に見た場合と短期的に見た場合でどのような違いがあるのか。
- ・ 今まで小さな事故も含めて事故は起きていたと思うが、すべて報告されてきたのか。

（２）当日のグループ対話の状況

＜第１グループ＞

学生「和泉・川島研（半導体の研究）」、SNW[村島、高野] 教員 赤星教授

（第１グループ討議概要）

- ・ 再生可能エネルギーは、原子力発電の代替電源になることは出来ない。
代替電源としては、火力発電以外に無い。火力発電を大幅に増やすと、輸入燃料費の高騰や地球温暖化の問題がある。
再生可能エネルギーの中でも、太陽光や風力以外で地熱開発に注力すべき。
- ・ 原子力再稼働無しでは、年間３兆円が国外に流出しており、電気料金値上げ等深刻な経済への影響があることから、安全確保できたら、再稼働すべし。

＜第２グループ＞

学生「大塚研（電力機器の研究）＋渡邊研（電力系統の研究）」、
SNW（若杉、米永） 教員 渡邊准教授（大塚准教授）

・ 電力機器研究室と電力系統研究室のM1学生計１１名が出席した。あらかじめ学生側から質問を出してもらい、当日は、ファシリテーション要領に則って、まず、これらの質問を「安全性」、「テロ対策」、「電気料金」、「P A」、「技術伝承」に５分類し、それぞれの分類ごとに時間を区切って、計２時間に渡って意見交換した。

・ まず、学生からの質問にシニアが答え、シニアの答えに対して学生が新たな質問を投げかけるという風に議論は発展していった。我々シニアは、反論大いに歓迎という姿勢で対話に臨んだ。

原子力が専門でない学生ということで、原子力発電所の構造そのものについては必ずしも詳しい訳ではないと思うが、議論は上滑りすることなく、噛み合っていた。

・ 福島事故のポイントの一つである全電源喪失事象の問題とそれへの対策については、電気工学専攻の学生らしく理解が早かったように思う。その他の議論全般についても、いたずらに情緒に流されることなく、冷静に物事を判断する力を持っており、日頃の教育がしっかり成果を上げていると見た。

・ このまま原子力再稼働ができない状況が続くと、原子力とその裾野を含めた産業全般の衰退を危惧する声や、更には電気料金高騰による海外への企業流失等を憂う声が多かった。日本産業の空洞化は、今後社会の第一線で活躍しようと思う技術系学生にとっては切実な問

題となっている。

・最後のグループまとめ発表では、「今回の対話会で学んだことをベースに、まずは家庭内で原子力の問題を話し合いたい」との意見表明なされた。

<第3グループ>

学生「大村・匹田・内藤研（電力用半導体、電力機器、表面物性の研究）13名、SNW[樋口、針山] 教員 匹田教授、(オブザーバー) 松本

グループ③ 原子力の安全性等を考える ～

(グループ討論の進め方と概要)

参加者全員の自己紹介並びに学生達からは本日の対話に期待する点を発表してもらい、事前質問への回答と補足説明を行ったうえで、疑問点や関心点について討論を進めた。主な論点は以下の通り（順不同）。

- － 原発の安全性はどのような基準に基づき、誰が判断するのか
- － その基準は、震災・福島事故後はどのように変化しているか、又、規制組織はどのように改善強化されているか
- － 電力会社は震災・原発事故時にどのような対応、対策をしてきたか
- － 原子力に従事してきたものとしての本音と建前はどうか
- － 原発の開発・建設・運転・維持管理での電力会社とメーカーの役割分担はどのようなものか
- － 原発の危険性や放射線リスクについて専門家と一般人とで大きな乖離が見られるが、このギャップはどうすれば埋められると思うか
- － 日本が仮に原発ゼロになっても、海外で事故が起きる可能性はあるので、どのようなことを一番危惧すべきか
- － 安全強化で原発に膨大なコストをかけても石油に依存するより有利か
- － 原子力技術（情報、人）の海外流出はどの程度危惧すべきことか
- － 日本の原子力産業、原子力発電事業は将来展望本当にあるか

(所感)

大変深みのあるかつ本質に迫る疑問点・論点が続出し、本音で討論が出来たことは喜ばしい。ただ、グループ参加者は総勢17名となったので、発言の機会を失った学生もいたものと推察。今後の改善として、5～6名でのグループ構成を考えたい。

<第4グループ>

・学生：白土・豊田・松平研究室（太陽電池とその宇宙利用の研究室）（5名）

・教員：白土 竜一教授

・担当シニア：金氏 顯、小池 正実

・状況

・各自、自己紹介に続き、「今日の対話に期待すること」、「今日聞きたい質問、疑問、

要望など」を説明した。

- ・ 事前に学生側から提示された質問に対して順を追ってシニアが回答し、自己紹介の中で明らかにされた追加質問を含めて、学生、シニア双方から、質疑応答がかわされた。
- ・ 学生側が、「宇宙太陽光利用システム」(SSPS: Space Solar Power Systems)の特徴、開発動向などをパワーポイント資料で概説。各種電源間の利害得失については、グループ討議成果を活かした修正を行った。
- ・ 今日の対話に期待することとしては、分かりやすい回答、原子力に対する理解の深化、原子力廃止の実現可能性、本音での議論などが示された。
- ・ 議論は、原子力発電の再稼働ができない現状での代替電源、地域経済への影響、原子力事故の風評被害対策、原子力発電の他の電源との経済性比較、原子燃料サイクル事業や使用済燃料処理の見通し、福島事故の人災的側面、低負荷運転の可否、海水からのウラン回収技術などと多岐にわたった。
- ・ グループ対話のまとめとしては、原子力発電、学ぶこと、マスコミ対策、SSPS開発などの重要性が確認された。

<第5グループ>

学生：松本研+三谷研（パワーエレクトロニクス、電力系統の研究）、

SNW[大塚、中田] 教員 三谷教授

・ 状況

- ・ 自己紹介に続き、事前質問の補足と追加質問が出された。
- ・ 議論は、再生可能エネルギーの成立性、原発停止に伴う影響やリスク、そして自分たちに望むものが主要テーマでした。
- ・ 実運用上やさまざまな社会面からの問題点についてまで議論しました。
- ・ グループまとめ発表で、リスクを乗り越える技術者の姿勢を垣間見ることができ、有効な議論ができたと感じました。

10. 講評

(若杉) 双方向の対話形式は九工大では初めての試みであったが、参加した学生は福島原発事故後の重要なエネルギー問題について真剣に質問してシニアが答え、有意義な体験であった。対話会で学んだことを自分の意見や考えに直し、周囲に積極的に発言して欲しい。将来は学生諸君のものであり、それを良くするか悪くするかは皆さんの肩にかかっている。

(村島) 学生との活発な意見交換ができ、手応えを感じている。原子力の必要性、再稼働等シニアの主張について、大筋理解頂いたものと思っている。皆さんには、今後、家族等周りの方に対し、今日、議論頂いた複合的視点からのエネルギーの話をして頂きたい。

(匹田教授) 今日は原子力についてこれ以上ない正しい情報を得る貴重な機会だった。10人と人数が多すぎるグループもあったが良い経験が出来た。今後皆さんが社会に出て、会社の方向を決める、政策を決めるというような時に技術論で話を進めることが大事だ。フランスが原子力を強力に推進する政策にした理由を良く認識することが重要だ。

1.1. 懇親会挨拶

(松永学長) 企業など実社会を長年経験されたシニアの方々に来ていただき、学生達は原子力問題についての正しい知識を学び、また討論するという貴重な機会が得られた。懇親会では更に今後の就職活動や就職後の生き方など経験談もお聞きし、実りあるものとして欲しい。(金氏) 今日皆さんに伝えたかったことは、エネルギー問題は安全安心や社会経済への影響だけでなく、安全保障、国際関係、人材育成や教育など多様な観点から考えなければならないこと、また企業で働くことは金儲けの為ではなく社会の発展に貢献する、ということです。

1.2. シニアの感想

<大塚 徳勝>

第5グループのM1学生は、「パワーエレクトロニクス」と「電力系統」の研究室に所属しているが、対話テーマは、『今後のエネルギー政策』である。

しかし、原子力に対する学生たちの質問も意見もレベルが高く、所属研究室と対話テーマの間に、温度差は全く感じられなかった。

対話結果をまとめたグループ別の発表の際にも述べられていたように、日頃、大学で原子力について学ぶ機会は少ないため、今回の対話で、とりわけ事前に提出させられた「質問事項の作成」の過程において、原子力に関する知識が身に付いたものと思う。

<小池 正実>

- ・初めて学生と対話する機会を持つことができ、感謝したい。
- ・予め学生側から提起された質問には、原子燃料サイクルや廃棄物処理の課題、風評被害対策などがあって、原子力発電に対して厳しい眼を持っているのではと思っていたが、実際には、今の「脱原子力」の世相に否定的な考えであることが分かった。
- ・それは、研究者として、合理性、多面的思考、批判的精神に優れ、また、就職を控えた社会人予備軍として、脱原子力が経済、資源、地球環境などに与える負の影響を認識しており、メディア等を鵜呑みにしていないためと推察する。
- ・対話した学生は、宇宙太陽光利用システムの開発に関与しており、原子力発電の技術基盤やリスクに対する親和性が、相対的に高いと感じた。
- ・九州で、このまま原子力発電所が再起動しなければ、石油や天然ガスの追加購入によって、電気料金を3割以上、上げなければならないことを、電気利用者にしっかり理解してもらう必要がある。
- ・今こそ、真摯で誠実な双方向の対話に関係者に必要であると、改めて感じた。
- ・電気を送るためにどのような工夫や努力をしているかを分かりやすく伝えるとともに、原子力関連では、原子燃料サイクル、高レベル放射性廃棄物管理、原子力発電所の廃止措置などについても、さらに多角的な情報の提供が重要と思う。

<金氏 顯>

- ・地元北九州の国立工業大学での初めての対話活動を大学には7月に提案した。まず、副学

長で産学連携センター長でもあった鹿毛先生にお願いし、理事会で承認して頂き、取り纏めの先生には電気電子工学系の白土竜一教授に担当して頂くことになった。白土先生は「先端電気エネルギー特論」という修士1年の講座を担当されており、その講座の最後の授業として、同大学客員教授に就任したばかりの私が「原子力」を講義し、引き続き対話を講座総集編的に開催することになった。この企画は白土先生の考えだったが、これが大変効果的な仕組みだったと思います。産学連携を大変積極的に進めている同大学に相応しい教育効果があるので、来年度も機械系で同様な仕組みを行うことにしたい。

- ・学生人数が約50名に対し、8グループを想定しシニアは16名を集める予定であったが、11月は4大学で開催だったので10名しか集まらず、5グループとなり、10名のグループもあって対話はやりにくく、反省点である。
- ・学生達は大変積極的で疑問、質問、意見も活発に発言していた。従って、対話が盛り上がりかけたところに時間になった。しかし懇親会でその続きが出来た。大学側の事前の準備が良かったので進行も良かった。反省点は、シニアの人数不足、事前にもらった学生からの質問にシニアが回答を送ったがそれらが学生に渡ってなかったこと、ファシリテーターをシニアではなく学生にやってもらいたいこと、であり来年度は改善したい。

<高野元太>

・学生からの事前質問に、“どの発電方式が原子力発電を補う良い方式か”があった半導体研究のグループに参加しました。再生可能エネルギー源を用いた発電方式の実態を、若い人に説明できる絶好の良い機会と捉え、私なりに勉強して活発な議論を期待しました。準備した資料をベースの質問回答に対し、素直に原子力発電の必要性に賛同されると共に原子力発電の安全性や再稼働問題についても、シニアの説明に対して、特に異論なく理解を示された事で、有意義な対話であったと評価しています。

・ただ、もっと突っ込んだ議論の末に原子力発電が必要との結論に至れば、十分に理解されたと感じるのですが、こちらの説明（シニアに気後れされているのかも知れませんが）に対し、あまりにも簡単に同意されると拍子抜けで本当に理解されたのか一抹の不安を覚えました。

・しかし、対話を通して、学生さんはマスコミの反原発報道に惑わされずに冷静に日本の将来を見据え、原発問題に対処されている事が判りました。

・また懇親会では学生さんの就職や研究についても相談に乗ることができ、少しはお役に立てた気がしています。

・対話および懇親会共に有意義で、目的を十分に果たせたと安堵して帰路についた次第です。

<中田眞一郎>

・元気で活発な学生さんたちでした。正しく進めば未来は明るいと感じました。

・ものの見方、捉え方が技術論等に偏りすぎる面があるようです。今の社会では、多様な切り口で整理すべき事柄が増えています。原子力発電はそのさいたるものです。国民の生活様式から産業のあり方、政治、経済、外交にいたるまで、利害・得失が絡んでいます。マスコ

ミ報道のように一つのベクトルだけで判断できない点に力点をおいて対話しましたが、少なからず学生さんにも伝わった気がします。

・懇親会で、音楽活動を熱心にやっている学生さんに出会いました。彼は音楽活動が企業に色つき眼鏡で見られるのではないかと心配していました。心配ないと申しましたが、大人社会も本質をしっかりと見極める、力量や裁量が必要だと感じました。

<針山日出夫>

・今回は、金氏様はじめ九州地元の SNW 会員各位並びに九州工業大学白土先生、匹田先生のご尽力のおかげで有意義な対話会が出来たことに感謝いたします。対話イベント(含む、懇親会)で印象に残った事は以下のことでした。

- ①□ 学生達の多くがエネルギー問題について多面的な角度から真摯に考えようとしており、その為に正しい知識、見識を求めていること
- ② 学生達の質問・疑問の中には通り一遍のものではなく、エネルギー問題の本質を探ろうとする姿勢が散見されたこと
- ③ そのようなエネルギー問題の俯瞰の仕方と個々の問題点の切り口を授業で先生方が熱心にご指導されているということ

・今後のための改善点としては、①グループ討論の人数を 5~6 人に絞り込んで、より活発な討論が出来る設定を検討すべきと思いました。又、②各グループのテーブルに画面サイズの大きい PC を配置すれば、予め準備した USB メモリーを使ってより効果的な補足説明などが出来、対話・討論を充実できるかと思料します。

・尚、SNW サイドから見れば、エネルギー問題に深い見識を持っておられる九工大の諸先生方と今後更なる連携を継続し、学生達により適切な情報機会の提供が毎年出来れば大変結構であると思います。

<樋口勝彦>

・工業都市に実学を重んじた工業専門学校として必然的に発生した栄えある歴史を誇りとする、九工大生との対話ということで今までとは質的に違ったある種の期待を持って対話に臨んだ。原子力を専攻していない電気電子工学系の学生たちとの対話ということで不安もあったが、その質問は原子力の安全基準・開発工程等に焦点があり、理路整然とした思考が根底にあり、しっかりとした論拠に沿っていることを見て取った。

・ただ、質問の中には原子力に従事している立場からの本音と建前を聞きたい、があり、これは福島以降の対話で学生が最も知りたい共通項であると感じた。原子力は本来危険であるがそれを技術者の英知で安全なものとして地球を救う人類の公共財とするため技術者が気概を持って活躍できる場であるとの本音と願望を伝えたが、このことを頭の片隅において将来原子力に何らかの形で遭遇した時冷静な判断のもと、培った技術力を国内にとどまらず未来の世代のために役立てて欲しいと願わずにはおれない。

・SNW 会員の紹介の中で、所属会社への採用例や、寄附講座という会員と九工大との繋がりも紹介され、学生にとっても身近に感じてもらえたのではないだろうか。幸い教員の皆様

の絶大な熱意もあることだし、この活動を今後も継続する努力が我々にも求められていると痛感した。

<村島 正康>

- ・学生からの質問は、活発であった。
- ・基調講演を含めてシニアの主張について、大筋、理解したようだ。
- ・学生は、原子力再稼働無しが日本経済に与えるマイナスの影響に大いに関心を示した。
- ・メディアが一面的な主張、報道することを理解している学生も結構いた。
- ・再稼働を含めた原子力の必要性について理解を示す学生は、予想よりも多かった。

<米永感想>

- ・久しぶりの対話会出席であった。学生からの事前質問への回答書を作ってみた。毎度のことながら、人を説得する回答書を作るといのはなかなか難しい。
- ・私に取って5回目の対話会出席となったが、学生は積極的に意見を出してくれ、今までの対話会の中で一番活発な意見交換ができたと思う。
- ・電気工学専攻の学生は、卒業すると、原子力産業に限定されることなく、様々な産業での活躍が期待されている。学生に将来の進路について尋ねたところ、この逆境下にあって、11名中2名の学生が原子力関係の仕事に進みたいということでこれには感銘を受けた。

<若杉和彦>

- ・九工大では初めての「学生とシニアの対話」であったが、白土先生をはじめ大学側の積極的な応援により、47名に及ぶ多くの学生が参加し、昨年3月の福島原発事故後の原子力やエネルギー問題に関して真摯な議論が展開され、心から感謝申し上げたい。
- ・世間では脱原子力の強い向かい風が吹いているにも拘わらず、学生諸君が不適切な先入感に毒されることなく、真面目に問題の本質と解決策について質問し、討論し、学んでくれたことが最大の成果であったと思う。
- ・対話会終了後には各グループから対話の内容が発表され、決意表明もあった。基調講演や対話会でのシニアの発言を理解するには相当の知識が必要であり、部分的には十分理解されたとは言い難いところもあったが、将来は若い学生諸君のものであるから、大切な将来のエネルギー問題に対して自分の意見を持ち、発言して欲しい旨講評した。
- ・また、懇談会では松永学長をはじめ、多くの先生方や学生が参加され、原子力やエネルギーの他、人生経験等も織り交ぜてシニアと交流出来たことを嬉しく思う。

(注)

1. この対話会は、九工大の2012年度「先端電気エネルギー特論」の最終講義として開催、単位となる。
2. 「先端電気エネルギー特論」は2年に一度開講、従って来年度の開催は電気電子工学研究系では出来ないとのこと。そこで、来年度の対話会は機械知能工学科の赤星保浩教授にお願いすることし、快諾いただいた。